
反愛玩同盟

佐藤河岸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反愛玩同盟

【Nコード】

N5025D

【作者名】

佐藤河岸

【あらすじ】

ある日少女の元に宛名違いの手紙が届く。懺悔と幻想の回顧録。縦書き読みなんとなく推奨。

序章【1】（前書き）

以前、携帯小説サイトに掲載した作品を設定等見直し再編集したものの。

序章【1】

私はどうしてもその手紙を処分することができなかった。

そうしてやはり彼は帰って来ない。

だからもう、早く終わらせてしまおう。びりびりと引き裂いてしまおうか。

それとも灰皿の上で一氣に燃やしてしまおうか。

手のひらの上でしつとりと湿気を含んだ封筒を弄び、散々考えたあげくまたもとの場所にしまうを繰り返す。

おそらくこの先も彼に会うことは二度と無いだろうと思いつつ、私の手は未練がましくそれを離そうとしない。

今年でもう九年目の十一月になる。あの時から続いている壁画の用水路までの散歩道をたどる足取りも、この時期はやけに重く遅くなってしまうのだ。

脚の短い犬を連れた老婦人とすれ違う。ききわけなく綱をぐいと引っ張り、それでも愛想のいい顔を主人に向けながら犬は懸命に歩いている。太りすぎで出た腹の毛が地面を掃除していた。

犬もいないのに私は何故こんな所を歩いているのだろう。

『変質者に注意！みんなみている』赤字ででかかど書かれた文字が目に入る。

用もなくこんな人気のない道を歩くのはおかしい。

それでも私は、ここに足を向けずにはいられなかった。

連翹の垣根の向こうに彼が立っているかもしれない。あの角を曲がったら照れたようなかなしいような笑顔で私を待っているかもしれない。興奮したとき腹から沸き立つ奇妙な気持ちの悪さを抱えて、

のろのろとそこへ進む。

勿論、誰もいない。

その結果はバイオリズムの関係でどうしようもなく私を物悲しくさせることもあるが、たいていは「ああ、そうだろうな」と感じるだけだ。

昔童話かなにかのヒロインが十一月ほど陰気なものはないと言っていたが、私にとってはあれば憂鬱だがなければ空しい季節である。そんな事を考えながら、三日めの経血のようにならなく月の終わりを迎え、また約束は守られず、手紙はそのまま引出しの奥で呼吸を続ける。

家へもどるとテーブルの上の瓶に寒椿が活けてあった。

一階の角部屋のおばさんが持ってきたのを母が飾ったんだろう。部屋はまだ暖かい。二人でお茶でも飲みに出かけたのかもしれない。このごろやけに私にひつつきたがる母がいないのはいいことだ。片付けも大体終わっているのびのびとリビングでくつろぐことができた。

眼の端にぼんやり赤い花びらがひらついている。

私はこれと山茶花の見分けがつかないのだが、いつか彼はこの花を見たときすぐに名前を当てて見せた。

そういえば彼はやけに草花に詳しかった気がする。男がそのような細やかなものに興味を持っていること自体私にはおかしく思えるのだが、彼の場合それに執着している感があった。散歩の途中によその庭木や野草を見る目は熱っぽく、幼いながら私は下腹のあたりに妙なときめきを感じた記憶がある。

波にのまれていく。

やはり十一月は彼の事ばかり考えてしまう。それがあったことすらあやうくなる景色を頭の中で切り換える。彼の花に対する愛情とはまたベクトルの違った執着心が思考の根っこを絡みとった。ザッピングできないテレビを蹴飛ばし、伸びきったビデオテープを再生する。いつかの声が私の口を借りて出てくる。

「猫だ」

これはどこの場面だったか。

「猫だ」

口数の少ない彼がこぼした言葉。見つけるのはそう難しいことではない。

最初まで巻き戻せば済むことだ。

そして季節を言い訳に、私はまたあの日々を繰り返し始めた。

確か五月だったと思うが、彼と会った日はいやらしい小雨が降っていた。

傘を持たずに学校へ行った帰り道、水びたしの靴はぎっちゃぎっちゃと音をたて、おろしたての夏服はすっかり駄目になった。

肌に張り付く布の感触と、なぜが頭にちらつく「情事」の文字がどうしようもなく私をみじめな気持ちにさせ、早く着替えをしたくて堪らなかった。

見慣れた白いコンクリアパートが目に映る。吹きさらしの階段を一気に駆け上がり、そこから三番目のドアの前に落ち着いた。表札を

確認した後、ポケットをあさり鍵を開ける一連の行動を終えた後、勢いよく扉を開ける。この時間部屋には誰もいないので、なるべく元気よく入るようにしている。これも決まっていることだ。そして靴を脱ぎ散らかし、まっ先に風呂場へ行く、はずだった。

序章【2】

「あれ」

玄関に濡れた封筒が落ちていた。

むき出しのコンクリートの上のそれはやけに白っぽく、何か高尚なものに見えた。

アパートのドアには直接郵便受けがついていて、配達されたものはそのまま玄関に落とされる乱暴な仕組みになっている。

その封筒に異質な雰囲気を感じつつも、どうせ町の何とか新聞かピンクチラシのたぐいだろうと宛名を確認した。

「…これ、隣宛てじゃん」

差出人の名前はなかった。心のどこかで少女漫画のような展開を淡く期待していた自分が腹立たしく、濡れた足のままりビングに向かった。テーブルに無造作に手紙を放り投げると、台所へ行き戸棚の上にあつたスナック菓子を開けようとした。袋が濡れた手が滑ってなかなか上手くいかない。

昔から不器用でこういったものが一度で気持ちよく開封できたことがない。いつもは「またか」で済まされることも、今日はやけに癢に障る。雨が降っていることも、傘を持っていかなかったことも、制服が濡れたことも、そのことで多分親に叱られるだろうということも…

腹も空いてきたせいか、いらつきはじくじくと募ってくる。

「もう!」

やけくそになって思いつきスナック袋の両端を引っ張ると、ぶぱ

つと不気味な音をたて中身が一気に飛び出してきた。乾燥した菓子とそのかけらが床いっぱい広がる。

床の茶とスナックの毒々しい黄色のコントラストがまるで写真のよう遠く感じた。頭の端が痛い。

無言で這いつくばり、散らかったかすを拾う。

ばかばかしい。本当に馬鹿みたいだ。

被害はリビングにまで及んでいた。ろくに掃除をしてない床のほこりも同時に除去しつつ片付けを続ける。テーブルのあたりまで進むと汚れもだいぶなくなってきた。

手の中に溜まったごみも片付けなきゃ、と考えつつ立ち上がると、狙ったように角に頭をぶつけてしまった。

なんとも言いようのない痛みがじわつと広がる。頭をおさえつつその場でのたうちまわって、行く場所のない怒りを持て余した。テーブルに今までは感じたことのなかった嫌悪が湧く。悪いのは自分だが。

衝撃でばやけた視界に、テーブルの上の封筒が映った。一連の不幸に腹が立っていた私には、それすら自分に害をなすもののように思えた。このさきこれを隣に届けなくてはならない手間を考えても、何か嫌がらせにすら感じられた。

分厚い封筒は、私をつっぱねるような固いイメージで横たわっている。

こんな陰鬱な気分の中、今まで見たことのない隣人へこれを渡す義務が私にあるだろうか。

放っておけば母がやってくれるだろう。でもそれでもなにかしつくりこない。

もし、これがとても重要な要件だったら。差出人が未記入なのもおかしいし、この厚さからしてただの手紙ではなさそうだ。

先ほどの痛みは治まっていたが、判断能力は鈍ったままだった。募

つたいらつきは短絡的な行動へ私を走らせた。

…今届けにいくのに必要のあるものかどうか、中身を確認してしまおう。どちらにしろこの時間に家にいるかどうかも解らないし、開封されていることに気付いたとして、誰がやったかなんて見当もつかないだろう。せいぜい郵便局に苦情が行くくらいだ。テレビじゃ今ワイドショーくらいしかやってないし、お菓子もぶちまけてしまったし、何もすることがない。いい暇つぶしになりそうだ。

『つかつとなつてやつてしまった』

頭の足りない非行少年の言い訳のようだが、私の気分はそれすら正当な理由になつてしまふほど捻くれた状態になつていた。

そうと決めたらもう展開は早かった。

錠を取り出し、封筒の頭の方を慎重に切り落とした。

ジヨキツという残酷な音が耳から体へ通り抜け、顔も不思議とにやけていく。

中身を取り出し、畳まれた便箋を広げる。覗きでもするようないや実際これはれっきとした覗きであるが、そんなことも気にしないようないやらしい気持ちで、文章に目を走らせる。

『君はいきなりこんな手紙を受け取り困惑していることと思う。』

住所まで調べ上げて、僕が嫌で君はここを出て行ったのに、今さらいっただういいうつもりなのか、腹立たしく感じるかもしれない。

だが、この歳になって僕はやっと決心がついた。

このことを君に告げるのは辛い。きっと益々僕を憎たらしく思うだろう。僕はそれが恐ろしくてたまらない。もう二度と会うことはないだろう君に、最後まで疎ましく思われて終わってしまうことがとても残念だ。でも僕は君に懺悔しなければならない。

あの懐かしい同盟の規約に従い、僕はいつだってその本質に背いていたことを、それを黙って君を連れていこうとしたことを、その全てを告白しなければならない……』

体の全身から、さあっと熱が引けていくのが解った。

整った字体は徐々に乱れていき、書いた本人の狼狽がみてとれた。私をもっと調子に乗っていたら、それすら面白がって読み進めていただろう。しかし私はそこまで馬鹿ではなかった。『懺悔』などという小説でしか見たことのない文字がそうさせたのかもしれないが、十四かそこらの餓鬼にもこれは盗み読みなど許されるはずのない内容だと理解できた。

どうしよう。どうしてこんなことをしてしまったんだろう。

便せんにふれた指先の冷たさは頭にまですっかり回ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5025d/>

反愛玩同盟

2010年10月14日13時49分発行